

# 日本地衣学会

# No.70

# ニュースレター

Newsletter from the Japanese Society for Lichenology

目次	会員通信.....	247
	雲南地衣類調査行2006 ―ハリガネキノリ属を求めて―/原田浩.....	247

## 会員通信 From Members

### 雲南地衣類調査行 2006 ―ハリガネキノリ属を求めて―

A field trip for lichen study in Yunnan, China, 2006 (part 1) / by Harada H.

原田 浩：千葉県立中央博物館

早いもので、雲南への訪問は今回が4度目となった。1994年の初訪問のときは、感動の連続だった。2度目3度目は、2003年と2005年、いずれも本誌で報告したように、淡水生アナイボゴケ科 (Verrucariaceae) の調査を実施した。そして今回は、ハリガネキノリ (*Bryoria*) 属の調査である。

\* \* \*

2006年8月21日、ソウル経由で昆明に深夜到着した。22日は打ち合わせと準備、23日には昆明を発ち北西部の山岳部へ。数箇所まで調査をして、9月1日には再び昆明に戻る、という計画。メンバーは、私と、昆明植物研究所の王さん、これに、3名の女性を加わった。このうち一名は、韓国の国立 Suncheon 大学の Hur 氏の下で学生であった、Oh Soon-ok さん、Soon-ok (スノ) と呼ばれていた。この春から昆明植物研究所の PhD の学生となり、雲南の *Ramalina* の分類を研究されている。もう一名は、同じ研究所の、Phytochemistry の PhD の学生で牛 東玲 Niu Dong-ling さん。 *Lethariella* 属地衣類の地衣成分を研究されていた。小牛 Xiao-Niu (シャオニウ) と呼ばれていた。そして最後の一名は運転手の Lu Lu (ルル)。さて、いかなる旅になることやら。



図1. 調査隊のメンバー。左から王さん、ルル、シャオニウ、スノ、著者。8月24日、老君山にて。

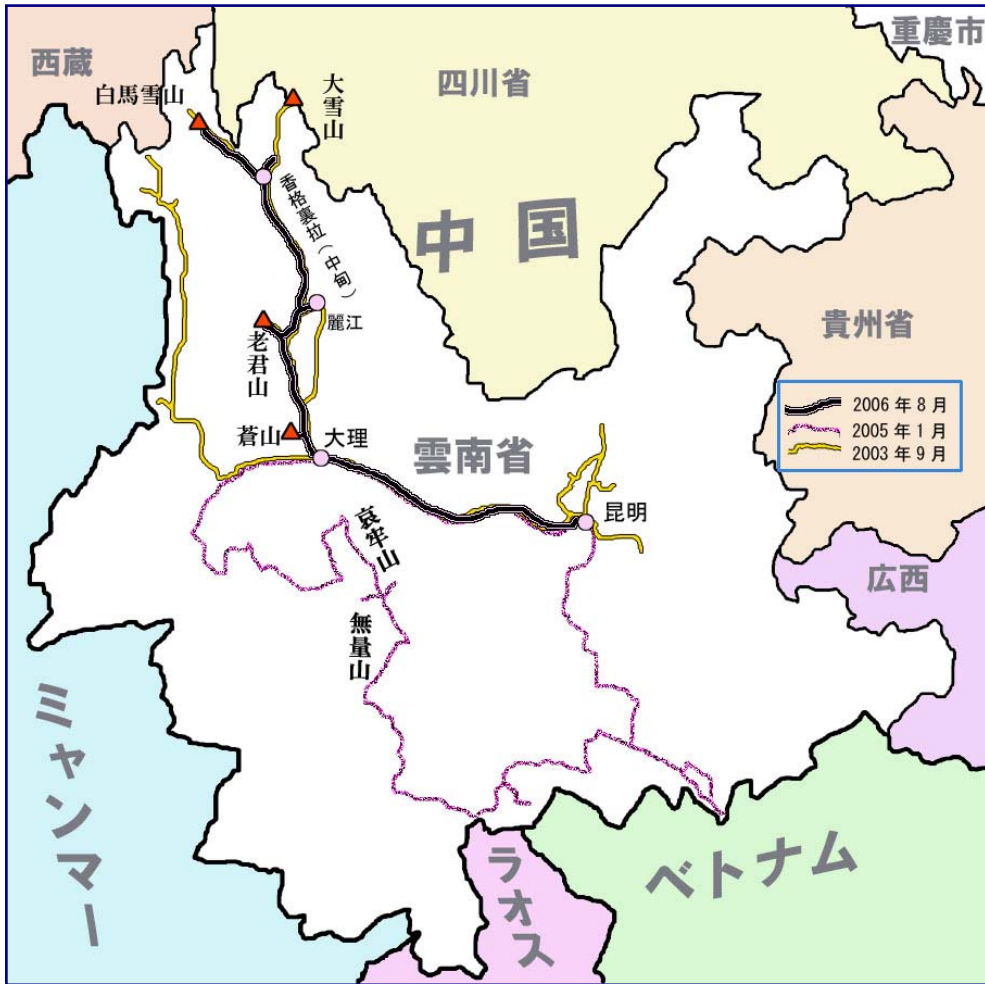


図2. 調査ルート。2003年と2005年のルートも併せて示す。今回の訪問は昆明から北西方向のみで、2003年の調査で訪れたところばかり。

\* \* \*

## 老君山再び

大都市昆明(Kunming;クンミン)の渋滞を抜け、ルルの駆る車は軽快に高速道路を飛ばし、ちょっと遅い昼食は大理(Dali; ダーリ)で、そして時刻には老君山(Laojun-shan; ラオジュンシャン)の麓の町、剣川(Jenchuan; ジェンチュアン)に着いていた。道路は来る毎に良くなっているようである。仮に大理から東側のルートをとれば、高速道路があるので、もっと速く北上できて、その日のうちに香格裏拉に着くことも可能になったのだと聞いた。12年前に訪れたときには、昆明

から大理まで一日、更に麗江まで一日、香格裏拉(当時は中甸と呼ばれていた)に更に一日の、計3日も要したというのに。

ちなみに雲南省の面積は日本よりちょっと広めの約38万km<sup>2</sup>、緯度は北緯およそ21度から29度で、台湾から沖縄本島を経て奄美大島と同じくらい、標高の一番低いところはベトナムと接する河口(Hekou; フーコウ)で約70m、高いのは北西端にある梅里雪山の6740mと幅が広い。昆明と大理は標高2000m前後、その間には大した山岳は無く、平地は水田、丘は比較的乾いているようである。自然植生は残っていないが、あるとしたらカシ林だったのではないだろうか？



**図3. 低木の枝を彩る地衣類。** 見事な等長二又分枝をするツノマタゴケモドキ属 *Everniastrum* の裂片に、赤褐色の子器が雨にぬれて映える。まだハリガネキノリ属 *Bryoria* は出てこない、

剣川の町から街道を北上し間もなく、西のわき道に反れる。とたんにぬかるみになる。3年前とまったく変わらない。四輪駆動ではないルルの車は、時間をかけながら慎重に進んだ。斜面を登るにつれ徐々に地衣類が目立ちはじめ、2500 m を超すといよいよ地衣類の楽園が迫ってくる。

先ず最初の停車で見たのは(図3)、2005年の調査で雲南南部で繰り返し見た、ツノマタゴケモドキ属 *Everniastrum* である。しかし今回は、時折小雨がぱらつき地衣体は湿り、しかも子器が多い。赤褐色の子器は、まさに美しく花開いていた。他にはサルオガセ属

(*Usnea orientalis* か?)、カラタチゴケ属 (*Ramalina*)、ウメノキゴケ科の葉状地衣が多い。まだ目当てのハリガネキノリ属 *Bryoria* は見られない。

標高 3500m 位には特別な場所があった。川の源流部にあたり、斜面上のごく浅い谷に成立したヤナギなどからなる明るい低木林である。2003年の訪問時には、「カプトゴケ科の楽園」として報告した(本誌 39号)地点である。王さんによると、アンチゴケ属 *Anzia* のある種がこの山ではここだけに生育していることである。



図4. バンダイキノリ *Sulcaria sulcata* が多い。ハリガネキノリ属 *Bryoria* も出現し、その調査で忙しかった。おかげで、他の地衣類を十分に観察する時間がない。

谷底からほんの 5m か 10m外れるとカプトゴケ属 *Lobaria* に代わって、バンダイキノリ *Sulcaria sulcata*

や、ウメノキゴケ科の葉状地衣がシャクナゲなどの幹にまとわりつく(図4)。ハリガネキノリ属もそれなりに見られる。停車時間は比較的限られ、調査はとても忙しい。そこで、今回はまず *Bryoria* を探すことから始めたわけだが、そうすると、カプトゴケ科どころではなかった。そんなわけで、結果としてカプトゴケ科は、あんなにもたくさんあったのに、ほとんど採集できなかった。

交通の便が良くなったのは歓迎すべきことだが、これは逆に危険なことでもあった。つまり、ごく短時間のうちに標高の高い場所にたどり着くことができるようになったわけで、これによって高山病の危険が増すということにつながるからだ。果たして、標高約 3800 m の林道終点にある宿でその晩、私は頭痛に悩まされることになった。

(つづく)

## ●複写される方へ

本誌に掲載された著作物を複写したい方は、許諾を受けてください。詳細は本誌62号222ページに。

### ●Notice about photocopying

In order to photocopy any work from this publication, you or your organization must obtain permission. For details, see No. 62, p. 222 of this publication.

- Newsletter from the Japanese Society for Lichenology, no. 70, pp. 247-250: eds. Harada H., Okamoto T., Kinoshita Y. & Tanahashi T., published by the Japanese Society for Lichenology, 5 Oct. 2006.

日本地衣学会ニュースレター 70号

発行日：2006年 10月 5日

編集：原田浩・岡本達哉・木下靖浩・棚橋孝雄

発行者・発行所：日本地衣学会

〒010-0195 秋田市下新城中野

秋田県立大学生物資源科学部生物生産科学科内

©2006 日本地衣学会 (© 2006 The Japanese Society for Lichenology)

本誌記事の著作権は日本地衣学会に属します。無断転載・無断複写等は固くお断りいたします。